

のかもしれない。

米櫃に虫が湧くという、通常であれば好ましくない状況を、吉事が舞い込んでくる縁起ものととらえる点からは、滑稽かつ洒落た雰囲気伝わってきます。では、この賛の傍に描かれる瓢箪は一体どのような意味を持つのでしょうか。実は、その意味を読み解けば、巢兆ならびにその師系が欽慕した俳人、松尾芭蕉(まつおーばしろう・一六四四〜一六九四)への想いを垣間見ることができるのです。

■芭蕉の愛用品・瓢箪の米櫃 各地を行脚し、『おくのほそ道』など様々な紀行文を残す中で、「軽み」をはじめとした俳諧の新風を打ち立てたことで知られる芭蕉ですが、その活動は、延宝八(一六八〇)年に故郷伊賀(現三重県)を離れて江戸深川の地に芭蕉庵を結ぶところから始まります。

この芭蕉庵の様子を伝えた記述が、芭蕉門下の俳人、越智越人(おちゝえつじん)が、芭蕉の死後に撰集した句集『鵲尾冠(しゃくびかん)』(享保二年・一七一七序)にみられます。堂のうち茶碗十ヲ、菜刀一枚、米入る、瓢一ツ、五升の外不入、名を四山と申候。

芭蕉庵には、茶碗が十個、菜切り包丁が一つ、そして米が五升入るといふ瓢箪の米櫃が一つしかないといふ、芭蕉は「四山」なる銘を持つこ

の瓢箪の米櫃を愛用していました。

「四山」という銘は、芭蕉の俳文「瓢箪之銘」に、芭蕉と親交のあった俳人、山口素堂が付けたと記述されています。(『芭蕉翁絵詞伝 芭蕉翁俳句俳文集』大正十五年・一九二六)文中、芭蕉は「四山」という銘を気に入る、「物ひとつ瓢はかるきわが世かな」と詠んだとあります。

また、芭蕉の自撰句集『あつめ句』(貞享四年・一六八七)にも、「もの一つ我がよはかるきひさご哉」と、「瓢之銘」とは多少改変はあるものの、同様の句が収録されています。これらの句からは、芭蕉が瓢箪の米櫃を、単なる日用品ではなく、自身の人生観を示すキーワードとして重要視していた様子がうかがえるのです。

さて、巢兆の画賛に話を戻しますと、句中「米櫃」と書かれている箇所は、句の下に描かれる瓢箪が、芭蕉が米櫃として使用していた背景を思い浮かべれば、「こめびつ」ではなく「ひょう・へう(瓢)」と読ませることが出来ます。つまりこの句は、自身の草庵(『秋香庵』)の米櫃に茶立虫がわいた情景を、瓢箪を米櫃として愛用する芭蕉の暮らしぶりに仮託してあらわした句であると考えられるのです。

あるいは、巢兆も芭蕉の真似をして実際に瓢箪を米櫃にしていたのかもしれない。巢兆の落款・印章は

巢兆の持ち物に記した名前のように見えますし、よく見ると少し底が欠けたように描かれる瓢箪図は、虫食いにあった実物の瓢箪の姿をあらわしたかのようです。いづれにせよ、画と文、双方によって「米櫃」瓢箪「芭蕉」が連想される《瓢箪図自画賛》は、巢兆の確かな芭蕉研究の様相と、芭蕉への憧憬の念が反映された作品であるといえるでしょう。

■芭蕉の世界をみつめる 与謝蕪村と同時代に蕉風俳諧の復古運動につとめ、江戸に春秋庵をかまえた俳人、加舎白雄(かやしらお)。巢兆をはじめ、白雄に俳諧を学んだ俳人たちは、芭蕉と同じように全国各地を行脚し、または各地を拠点として、蕉風俳諧の普及につとめました。その普及力は、本来は芭蕉ゆかりの地ではない場所にも及びます。

埼玉の本庄・熊谷は、巢兆と同時代の白雄門下の俳人、常世田長翠(とこよだちようすい)が、地元の名

士戸谷半兵衛のもとに滞在し、俳諧活動を行っていたところから、蕉風俳諧文芸が盛んになります。妻沼(現埼玉県熊谷市)に建立され、巢兆がその由来を撰文した芭蕉碑「稻妻塚」(協働拓本展)に拓本を出展(図2)の存在は、この地域に蕉風俳諧が根付いていたことをよくあらわしています。

巢兆は撰文の中で、芭蕉が伊勢で詠んだ「稲つまや」の句の情景が妻沼でも感じられたためこの碑を建てたとしています。このように、土地の由来にかかわらず、芭蕉が感じたものと同じ風情を体得することを重視した蕉風俳諧の俳人たちですが、そこには、芭蕉および芭蕉の句世界への深い理解が求められます。

《瓢箪図自画賛》は、巢兆なりに、芭蕉の世界を見つめようとした姿を、画賛から感じ取ることが出来る点で、面白い作品であると言えるのです。

(郷土博物館専門員)

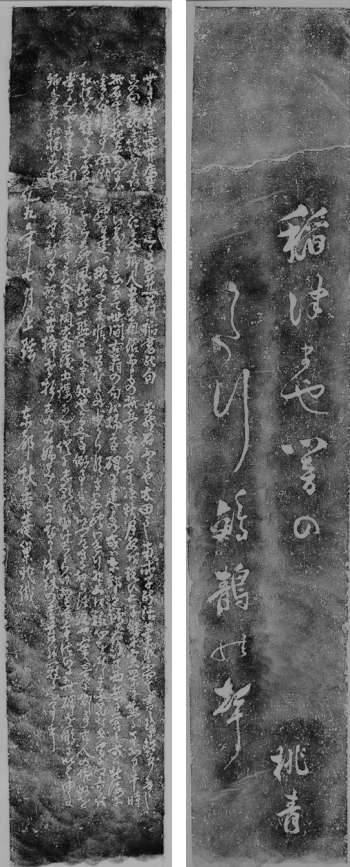


図2 「稻妻碑」拓本 左が巢兆撰文による 建碑由来



話題の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に足立遠元が登場しています。そこで、今回は番外編として、足立遠元について紹介します。

■**足立郡** 足立氏と足立区の足立は、共に武蔵国足立郡という地名にちなんだものです。足立郡は明治十一年（一八七八）に廃止となりましたが、古代から近代まで存在した広大な郡でした。荒川と元荒川・綾瀬川に囲まれた地域で、北は埼玉県鴻巣市まで及び、南端が足立区域でした。したがって、足立区と草加市や川口市は今でも東京都と埼玉県に分断されていますが、古代から近代までの



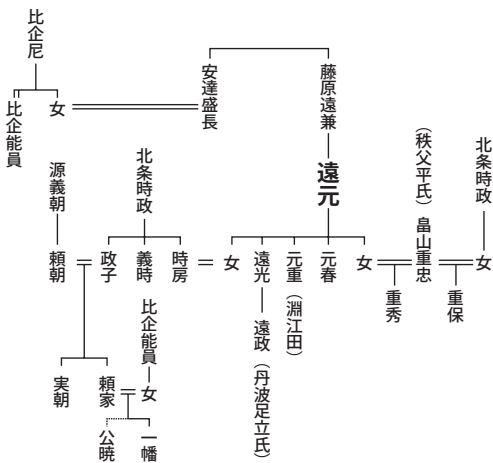
足立郡図 ●は足立氏館の伝承地

長い間、足立郡という同じ行政区画だったのです。そして、現在、足立という地名を継承している自治体は足立区のみです。

■**足立氏の出自** 足立氏は、京都の官人藤原遠兼が関東に下向し、子の遠元が足立郡を領して、足立を名乗り始めたと推測されています。

足立氏の館跡として伝わる場所は、桶川市やさいたま市などに複数ありますが、はっきりしたことはわかっていません。

■**安達盛長** 遠兼の弟が安達盛長で、盛長は頼朝が奥州藤原氏を滅ぼした後に陸奥国安達郡（現福島県二本松市周辺）を所領として与えられたため、安達を名乗るようになったといわれています。盛長は頼朝の乳母比企尼の娘を妻としており、頼朝の信



頼厚い側近でした。盛長は遠元の叔父で、ドラマでも盛長を年上の役者が演じていますが、実際は遠元の方が年上とされています。なお、遠兼と盛長が兄弟だったということを疑問視する見方もあります。

■**平治の乱** 遠元は、平治の乱（一一五九年）で頼朝の父義朝に従い、平清盛と戦いました。『平治物語』には、恩賞として遠元が右馬允（うまのじょう）に任官したことや、合戦の際に味方を助け活躍した逸話も記されており、勇ましい武士であったようです。

平治の乱には三浦義澄や上総広常など関東武士が多く参加していましたが、遠元はその中心人物の一人でした。結局、義朝は敗れ、落ち延びる途中で討ち取られ、遠元等は関東へ逃亡しました。頼朝も捕まりましたが、清盛に命を助けられ、伊豆へ流されました。そして、北条時政の娘である政子と結ばれます。

■**治承・寿永の乱** 治承四年（一一八〇）八月、頼朝は平氏を打倒すべく挙兵しますが、石橋山合戦で敗れ、船で安房国へ逃れます。そして、名門の上総広常と千葉常胤を味方に付け、隅田川を渡って武蔵国へ入りま

す。この時、足立遠元と豊高清光（清元）・葛西清重親子の三人が頼朝の元へ馳せ参じます。遠元は豊島氏とも血縁があり、遠元が二人を誘ったのではないかと推測されています。こ

の結果、武蔵武士の多くが頼朝に従うことを選びました。この功績によって遠元は頼朝から足立郡の支配を認められました。他の武士が頼朝からこうした権利を認められたのはもつと後のことで、遠元が頼朝から厚遇されていたことがわかります。

■**公文所（くもんじょ）** 平氏との戦いが続く中、頼朝は元暦元年（一一八四）十月に政務を取扱う公文所を創設し、遠元が寄人（役人）になります。寄人選ばれた他の五人は文士といわれ、武士は遠元だけでした。

遠元は武士を抑えるための重しとして選ばれたと考えられますが、遠元自身にも文士同様の器量があったとみられ、こうしたことが文武両道の人物と考えられる理由です。

■**幕府の宿老（しゅくろう）** 文治元年（一一八五）三月に源義経が壇ノ浦合戦で平氏を滅ぼします。そして、同年十一月、頼朝は後白河法皇から守護・地頭の設置を認められます。従来は、頼朝が征夷大将軍となつた建久三年（一一九二）を鎌倉幕府の成立としていましたが、近年では守護・地頭の設置を以て鎌倉幕府の成立とみなす説が有力です。

遠元は西国での合戦には参加しなかったようで、鎌倉に残った頼朝の補佐を安達盛長と共にしていたようです。鎌倉幕府の正史である『吾妻鏡』は、文治二年から遠元と盛長のこと

は、文治二年から遠元と盛長のこと

を「宿老」と記しています。「宿老」は重要な地位にいる人を指す言葉であり、有力御家人だけが宿老とされました。

■幕府の重鎮 平氏を倒した頼朝は、次に奥州藤原氏を標的にします。文治五年(一一八九)七月に頼朝は大軍を率いて鎌倉を出陣しますが、遠元と盛長も従軍しています。頼朝は藤原氏を滅ぼし、恩賞として盛長に安達郡を与えたことは先述したとおりです。

日本全国を従えた頼朝は、翌建久元年(一一九〇)十一月に武威を示すべく上洛し、後白河法皇と対面します。そして、右近衛大将に任じられます。十二月一日に右近衛大将拝賀行列が行われ、七人が付き従いますが、遠元もその一人に選ばれています。さらに頼朝は、御家人の中から功績のあった者十人を選び、朝廷に推薦して官職を与えますが、遠元も選ばれ、左衛門尉に任官します。

その他にも、遠元は頼朝の嫡子頼家の着甲始(ちやつこうはじめ)の儀など様々な行事などで重要な役割を果たしています。遠元が幕府における重鎮の一人であったことは間違いないと言えます。

■北条氏との関係 文治五年に遠元は、北条時政の子である時房の元服式に参列しています。そして建久年間(一一九〇～一一九九)には、時

房と遠元の娘が結婚したと推測されています。また、建久五年にも北条泰時の元服式に参列しています。遠元は、安達盛長を通じて比企氏との関係を強めていきましたが、こうして北条氏との関係も強めていきます。

■十三人の合議制 正治元年(一一九九)一月に頼朝が死去し、頼家が將軍となります。

頼家は専制的な政治姿勢を見せ、わずか二か月後には、反発した御家人たちによって頼家の親裁が停止され、有力御家人十三人による合議制へと移行します。北条時政・義時親子や比企能員・梶原景時・三浦義澄・安達盛長等と共に遠元も十三人に名を連ねていました。大河ドラマの名前は、この十三人の合議制が由来となっています。

しかし、同年十月、梶原景時に対して不満を持った御家人六六名が連署して景時を弾劾し、遠元も加わりました。景時は追放された後、殺害されます。こうして早くも十三人の合議制はほころびを見せるのです。

■晩年の遠元 遠元の生没年は不明ですが、十三人の合議制が成立するおよそ四十年前に起こった平治の乱に参加していることを考えると、どんなに若く推定しても六十歳前後でしょう。遠元の人生も晩年に差し掛かります。

建仁三年(一二〇三)八月、頼家

が危篤状態になります。こうした中で、頼家の子一幡を擁立しようとする比企能員を九月二日に北条時政が殺害し、一幡も殺害します。頼家は病状が回復しますが、伊豆国修善寺に追放され、翌元久元年七月に北条氏によって殺害されます。こうして北条氏が権力を握っていきます。

三代將軍には頼家の弟の実朝がなりますが、実朝は頼家の子である公暁によって殺害され、公暁も討ち取られます。その結果、頼朝の血統が絶えます。こうした政変の中で、遠元がどのように行動したかは不明ですが、実朝の着甲始の儀でも遠元と小山朝政が実朝に鎧を着せています。この頃には、頼朝時代に宿老と呼ばれていた人はみな死んでおり、遠元が最高齢の宿老だったようです。元久二年(一二〇五)元旦には嫡男の元春の活動が確認でき、徐々に世代交代が進んでいきます。

同年六月には、遠元の娘婿の畠山重忠と孫の重秀が北条氏によって滅ぼされるといふ悲劇もありました。有力御家人の多くは北条氏によって滅ぼされることになりました。

遠元の最後の記録は、承元元年(一二〇七)三月で、鬮鷄会に出席したことが記されています。この後、間もなく死去したのでしょう。

■足立氏と足立区 弘安八年(一二八五)、安達盛長の子孫である泰盛が

対立する平頼綱によって滅ぼされる霜月騒動が起こり、足立氏も運命を共にします。しかし、遠元の孫遠政が丹波国に移住しており、そちらの方は戦国時代に織田信長に滅ぼされるまで命脈を保ちます。

足立区に残る足立氏の痕跡としては、遠元の子である元重が淵江田を領しており、淵江は足立区に残る地名です。また、南北朝期には足立大炊介という人物が石塚を支配していたようで、石塚は栗原にある小地名と考えられています(栗原二―三―三には石塚公園があります)。さらに明治時代に伊興から出土した甲冑が足立氏のものであった可能性も昨年指摘されています(本誌六三六号で紹介した佐藤寛介氏の論文参照)。

足立遠元は、文武両道の人物として描かれています。そのメージにふさわしい人物であり、頼朝の幕府創業とその地固めに多大な貢献をした人物でした。今後、ドラマでは足立区にも縁のある足立遠元がどのように描かれていくのでしょうか。皆様もご注目下さい。

【主要参考文献等】

金澤正大『鎌倉幕府成立期の東国武士団』岩田書院、二〇一八年
同(Kanzawa)HP『歴史と中国』
『武蔵武士足立遠元』

(文化財係学芸員 佐藤 貴浩)